



けやき通信

Cooperative Faculty of Education, Gunma University News. "Keyaki"

第15号 (2025年3月)

夢の話

群馬大学共同教育学部長 藤森 健太郎

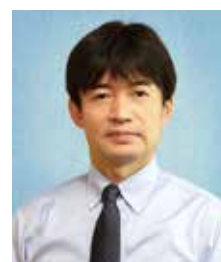
今回は実務的なテーマではなく、理想論めいた話をさせていたきたいと思います。

昨年の6月に、国立大学協会が出した声明の中にある文章が、ちょっとした話題になりました。国立大学の主に財政上の苦境を訴えた上で「もう限界です」という生々しい叫びで結ばれていたのが大きな関心呼んだのでしょうか。運営費交付金が少ないのだと、文教行政に責任があるかのように解されかねませんが、国家財政全体の逼迫の中で苦勞して予算を確保している側にも、もちろんおっしゃりたいことはあるでしょう。大学をめぐる個々の課題についてさまざまに改善の余地はありましようが、特定の誰かが、あるいはどこかだけが悪いというより、日本全体の苦境の反映とするほかないような気にもなってきます。

さて、私の前職は新潟県立歴史博物館という組織でした。新潟県の長岡市に所在しています。幕末の長岡藩は、新政府軍と戦うことになってしまい、激戦のあけく敗れて街は荒廃、財政的にも破綻状態となります。藩士も困窮しました。そんな折、長岡藩にゆかりのあるところから、米百俵の寄付がありました。食うにも事欠く藩士たちの中には早速それを分けて腹の足しにと考えた人もいたでしょう。その時、当時の藩の大参与で小林虎三郎という、役人であり儒学者でもある人物が、この米の使途について意見したということです。

もとより、食う事は大事なことだ。食わなければ、人間、生きてはゆけない。けれども、自分の食う事はかりを考えていたのでは、長岡はいつになっても立ちなならない。貴公らが本当に食えるようにはならないのだ。だからおれは、この百俵の米をもとにして、学校を立てたいのだ。学校を立てて、子どもを立たせてあげてゆきたいのだ。この百俵は、今でこそただの百俵だが、後年には一万俵になるか、百万俵になるか、はかり知れないものがある。いや、米だらなどでは、見つめれない尊いものになるのだ。そ

の日ぐらしでは、長岡は立ちあがれない。あたらしい日本はうまれなぞ。



いかがでしょうか。すこし劇的過ぎると感じますか。それもそのはずで、この文章は史実そのものの記録ではなく、山本有三の戯曲『米・百俵』での虎三郎役の台詞なのです。実際にここまで雄弁に理想論を語る場面があったかどうかはわかりませんが、小林虎三郎の著作や、彼が中心になって長岡に設立した国漢学校関連の諸資料を検討した研究に拠れば、彼が教育・人材育成こそ社会を支える基礎だと考え、提供された米百俵分を学校設立に充てたことはおおむね事実のようです。

現在の日本が抱える問題への処方箋はさまざまに議論され、実行にも移されており、中には教育に関するものももちろんあります。しかし、現時点でまだ子どもであったり若者であったりする人々への教育の充実、今すぐ効き目が見える施策ではありません。「衣食足りて礼節を知る」との言も一方にはあり、「今の米を優先しろ」とも思われそうです。大学も、学部も、教育界も、それぞれの学校も、みな今日の米に追われています。そのやりくりを何とかするのが、運営上の最低限の仕事であり義務であることは言うまでもありません。

それは重々わかりつつ、またこなしつつ、それでも「きれいな事」を堂々と口に出すことも必要ではないでしょうか。虎三郎の考えていた理想の教育とは、儒学の理念偏重を批判する実学寄りのもので、人材育成の目的は国家への貢献に重点が置かれていました。それらは彼の生きた時代背景のもとにありましたが、山本有三の戯曲にも戦時中の時局の影響があります。こんにちのわれわれはそれらとは異なる時代を背景に理想を練らねばなりません。しかしいずれにしても古人を想って、時には地域教育界の皆様と一緒に、大きな夢のお話もできれば、と思っているこの頃です。今後ともなにとぞよろしくお願い申し上げます。

「教職大学院の研究・実践と地域教育界をつなぐ」

専門職学位課程長 音山 若穂

12月14日（土）、15日（日）の2日間、日本教職大学院協会研究大会が荒牧キャンパスで開催されました。これは全国54の教職大学院の教員および院生、修了生が参加して毎年行われる、教職大学院としては唯一の研究大会です。14日に行われた「実践研究成果発表」では、全国から12の教職大学院の教員らが、それぞれの教職大学院での教育活動や優れた取組について報告しました。また、15日にはオンラインでの「ポスターセッション」が行われ、全国の教職大学院から53人の院生・修了生の研究発表がありました。本学からは昨年度教職リーダーコースを修了した岡村朋也さん（高崎市立国府小学校教諭）が、「コミュニティ・スクールの仕組みを生かした学校と地域の連携・協働体制の構築 ～地域学習カリキュラムの実践と改善を図る校内研修を通して～」をテーマに発表しました。

「ポスターセッション」に続いて、「教職大学院の研究・実践と地域教育界をつなぐ」をテーマに公開パネルディスカッションが行われました。今回は、例年の「ぐんまの教師力を高める」シンポジウムに代えて、この公開パネルディスカッションが群馬県教育委員会との連携事業の1つとして位置づけられています。

現在、教職大学院では、大学院の教育課程のなかでの院生指導にとどまらず、大学と教育委員会との連携体制をより一層強化し、教職の高度化に向けた協働的な取組が求められています。そこでこのパネルディスカッションでは、「つなぐ」ことに焦点を当て、教職大学院と地域教育界との連携を充実し発展させながら、教職大学院が地域の教育力向上にどのように貢献できるかを考えることにしました。

まず、修了生のなかから、藤井智章さん（第5期生、太田市教育委員会教育部生涯学習課指導主幹）と、福島裕美さん（第9期生、前橋市教育委員会事務局学校教育課指導主事）に登壇をお願いしました。

藤井さんは「教職大学院での学びを地域社会で活用するために ～生涯学習課・指導主幹（社会教育主事）として～」と題して、教職大学院で学んだことが修了後に

どのように活かされているかを具体的に例示しながら、現在の青少年係での担当業務における「つなぎ役」としての関わりを紹介していました。教職大学院で築いた同期生とのつながりや講師陣とのつながりが現在の仕事に役立っているとしつつ、もっと気軽に「つながる」ための工夫が必要であると話していました。

福島さんは「教職大学院の研究・実践と地域教育界をつなぐ ～教職員研修機関の現場から～」と題して、教職大学院で学んだことが教育研修係としての現在の仕事にどのように反映しているかを紹介しました。大学院の教員とのつながりが、研究員のみならず指導主事の学びにも役立っていること、特に経験のない指導主事にとって大学院の教員に相談できることは心強いこと、大学院の教員は異動が少なく中・長期的見通しを持って研修の支援に関わってもらえると話していました。

これらは修了生が「つなぎ役」となった例ですが、続いてデジタルにより教職大学院と学校現場を文字通り「つなぐ」実践例が、本学の濱田秀行教授から紹介されました。これは群馬大学と県教委の連携事業として行われた「デジタル技術によるネットワーク構築を通したへき地校・小規模校の校内研修支援」で、西部、吾妻、利根の3つの教育事務所管内のへき地・小規模校36校と大学とをデジタルでつなぎ、学校の研修主任の課題意識に応じてオンラインでの双方向型サポートを提供したり、研究授業等をオンラインで配信したりして、へき地校・小規模校の教員が同僚や他校の教員と対話する機会を提供するものです。濱田先生は取組の詳細や事後アンケートの結果を紹介しながら、その成果を報告していました。

コメンテーターは日暮利明先生（榛東村立榛東中学校教頭）でした。日暮先生は元本学教職大学院准教授であり、中部教育事務所指導主事を経て現在に至っています。日暮先生からは教職大学院と行政、そして学校管理職のそれぞれの勤務経験を持つ立場から、群馬では教職大学院と教育現場との強い連携があると指摘、いずれの実践も地域の教育力向上につながっていると評価したうえで、より一層「つなぐ」ことの大切さを強調していました。

当日は県内の教育関係者だけでなく、全国の教職大学院の教員、院生、修了生の多数の参加がありました。「教職大学院の研究・実践と地域教育界をつなぐ」という本学教職大学院の方向性を、広く全国に発信できたかと思っています。



令和7年度採用 群馬県教員採用試験結果

学生支援委員長 山口 陽弘

令和7年度採用群馬県教員採用試験の本学合格者は、現役106名、既卒者28名、合計134名という結果でした（表1参照）。全体合格者に対する占有率は、小中特別支援学校が29.2%、高等学校が15.1%、全体では26.7%です。表2は令和2年度から令和7年度までの志願者数（現役生）に対する一次・二次試験合格者数と合格率を示すものです。一次・二次試験ともに昨年度に比べ合格率がかなり上昇しました（なおR6、R7ともに卒業予定者が220名→190名と減員しています）。特に昨年と比較して、志願者数や合格率が上昇した点は、今後の本学の未来に向けて明るい希望です。そうはいうものの、世の中全般での教員志望者数の長期的な減少は、きわめて大きな課題であり、今後も本学ではこの課題に真摯に取り組んで参ります。

本年度も学生支援委員会主催での対策講座は充実させておりますが、同窓会主催の各種支援事業（面接試験の相談会・在学生への講演会など）も実施され、同窓会のご協力に感謝しております。また、本学の教育実践センター主催での教員の魅力を伝える講演会や、群馬県教委と連携しての、教職の魅力を伝える講演会を各種開催し

ております。教員志望者・合格者を少しでも増やすために、今後も学生支援委員会の事業に、みなさまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

表1：群馬県公立学校教員採用試験の校種別結果と占有率（既卒者含む）

令和7年度採用	全体合格者数	群大合格者数			占有率	
		現役生	既卒者	合計	現役生	全体
小学校	182	30	6	36	16.5%	19.8%
中学校	187	64	12	76	34.2%	40.6%
特別支援学校	46	6	3	9	13.0%	19.6%
小計	415	100	21	121	24.1%	29.2%
高等学校	86	6	7	13	7.0%	15.1%
合計	501	106	28	134	21.2%	26.7%

表2：群馬県公立学校教員採用試験における本学志願者数（現役生）と合格率

採用年度	志願者数	一次試験合格者数 (志願者に対する合格率)	二次試験合格者数 (志願者に対する合格率)
令和7年度	135	125 (92.6%)	106 (78.5%)
令和6年度	124	106 (85.5%)	86 (69.4%)
令和5年度	137	118 (86.1%)	100 (73.0%)
令和4年度	150	123 (82.0%)	101 (67.3%)
令和3年度	158	138 (87.3%)	102 (64.6%)
令和2年度	154	136 (88.3%)	113 (73.4%)

令和6年度の授業

教務委員長 河内 昭浩

本学部は、共同教育学部となり5年目を迎えました。宇都宮大学生とともに受講する「斉一授業」と、それぞれの大学で受講する授業との組み合わせに、学生も教員も慣れてきているように感じます。学生による授業アンケートを見ても、「斉一授業」に対する評価は、それ以外の授業と同様で、概ね良好です。「斉一授業」であれ、それぞれの大学の授業であれ、教員は、将来教職に就く学生の資質・能力の向上に資する授業を提供し、学生は、自ら意欲・関心を持って学ぶ。そうした好循環が生まれ、そして継続できるように、教務としても、授業環境の維持、改善に引き続き努めて参りたいと思います。

また、共同教育学部となり、これまでと大きく変わった点に、ICT活用の充実があります。「斉一授業」では主に、遠隔授業システムが用いられ、群馬大学・宇都宮大学の両学生が、ライブで同時に授業を受講しています。また、教師による授業資料の提供や、学生による課題提出には、LMS（Learning Management System）が多く活用されています。また小・中学校の学習場面に用いら

れている様々なアプリケーションも、授業づくりの学びの場面等で、大学の授業でも活用されています。また別に、学期ごとの振り返りには、ポートフォリオを活用しています。学生は、前学期までの成績や生活を振り返るとともに、翌学期からの目標を設定します。担任教員はそれを受け、指導する学生にアドバイスや励ましの言葉を送ります。

大学の教員養成における学びの在り様も、年々変化してきています。今後も教員養成により必要な授業となるよう、改善に努めたいと思います。



実留学、再開！みなさんも共同教育学部ならではの留学に参加してみませんか？

国際交流委員会 大下 達也・山田 敏幸

コロナ禍が落ち着いてきたことで、オンライン留学に加え、実際に現地を訪問する「実留学」が再開される機運が高まってきました。ここでは 2023 年度に実施した共同教育学部ならではの実留学のプログラムを 2 つ紹介します。

1 つ目は、1 月に実施した『アジア圏協定校での短期研修・日本人学校インターンシップ』です。本プログラムは協定大学での 1 日間の研修・学生交流と、その地域にある日本人学校での 1～2 週間のインターンシップからなる研修プログラムであり、コロナ禍以前から継続的に実施されてきました。2023 年度は、大韓民国の釜山とインドネシアのバンドンで実施し、2 地域合計で 3 名の学生（社会専攻、教育専攻、英語専攻）が参加しました。参加学生からは「何もかも新鮮で、毎日がとても充実していた。小規模校ならではの活発なコミュニケーションや、経験豊富な先生方の指導の下での研修を通して、在外教育施設について理解を深めつつ、自身の能力を高められた。」との声がありました。

2 つ目は、2 月中旬から 3 月上旬までの 3 週間で実施した『米国ミズーリ州立大学インターンシップ・英語研修プログラム』です。本プログラムは、アメリカ合衆国のミズーリ州立大学の①附属学校園で教職インターンシップを行なうとともに、②附属語学学校での英語研修に他国からの留学生と共に参加するという内容であり、理科、保健体育、英語とさまざまな専攻の 3 名の学生が参加しました。参加学生からは、「英語で教えるという貴重な経験を積むことができた。また、実際のコミュニケーションをとおして、実践的な英語能力を向上させることができた」との声がありました。

共同教育学部では、上記の 2 つの他にも、アジア圏、北米圏を中心に教員養成学部ならではの留学プログラムを提供しています。是非、学生のみなさんには実留学を経験していただき、自分自身が体験したことを直接語れる教員として、教壇に立って活躍していただきたいと思っています。

12 専攻による体験型イベントを含む対面オープンキャンパス開催！

入学試験委員会広報委員長 田井 健太郎

オープンキャンパスを 7 月 15 日（月・祝）に開催しました。本年度は、12 専攻による体験型イベントを含んだ全ての企画を対面型で実施することができました。各専攻のワークショップ、ミニキャンパスツアー、在校生とのフリートーク・個別相談と群馬大学共同教育学部での学びやキャンパスライフ、入試情報など、来場者が入学後の学生生活をリアルにイメージできるよう内容を企画しました。来場者は高校生 516 名、保護者 328 名、延べ 844 名でした。共同教育学部の施設のみならず荒牧キャンパスが一杯になったように感じる雰囲気の中で各イベントが賑やかに進められました。

当日は、多くの現役学生が専攻毎のプログラムの運営補助やキャンパスツアーのガイドで協力してくれました。本学部の魅力を語るだけでなく、来場者の質問に対して自身の経験を元に親身になって応える姿が大変印象的でした。保護者の中には、群馬大学や教育学部の卒業生もいっしょに、現在の共同教育学部の教育研究活動

に強い関心を示していただき、励ましのお言葉を多数いただきました。

オープンキャンパスは、本学部への学生募集活動の意味が第一義にありますが、その他にも高校生に教育学あるいは学問の魅力を伝えることにもその意義が見出されると思います。また、地域における学術的コミュニティセンターとしてステークホルダーの方々に共同教育学部が保有するリソースを還元することもこのイベントを通して果たせるのではないかと感じました。

猛暑日が続く中お越しいただいた皆様、本当にありがとうございました。

受験生の皆さまの未来が素晴らしいものになることをお祈りしています。



群馬大学共同教育学部ニュース「けやき通信」 第 15 号（2025 年 3 月）

発行：群馬大学共同教育学部

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町 4-2 / TEL：(027) 220-7204 / URL：https://www.edu.gunma-u.ac.jp/

・本紙に関するご意見ご感想等ございましたらお寄せください。